

の通常国会に提出されたが、衆参厚生労働委員会での審査の結果、全会一致とはならず「審査未了」に終わった。その最大の要因は、厚生労働省が「請願の趣旨は現行法の運用で可能、法改正は不要」と国の責務を明確にすることを嫌ったことと、自民党が請願採択に「同意できない」との態度をとったことにあった。

おわりに

遺伝子組み換え食品、クローン牛など、新しい技術によって生産された食品の安全

性に対する消費者の関心が高まっている。狂牛病、ダイオキシン、環境ホルモンなども大きな問題となっている。科学技術の進歩や生産・流通のグローバル化に伴って、今後予測できないような問題も起こる可能性もある。これらどの問題をとっても、もはや消費者個人の努力や選択だけでは、食品の安全を確保することはできない。わたしたちは、食品の安全確保が、行政上の重要な課題として位置付けられ、それを実現する社会的システムが整備されることが必要であると考えている。

事件続発の石川県牛乳業界だが、従来とは異なる発想で、地域に密着した適正規模の経営に取り組み、高品質の製品を目の行き届いたサービスの中で提供することを目指している牧場も存在する。その牧場を家族で経営されている平松薫さんに、取り組みを紹介していただいた。安全で安心な食べ物の提供、そして、今後実現していくべき維持可能な社会の確立を考えたとき、この取り組みはひとつのモデルとなり得るのではないだろうか。

平松牧場としてのありかた

平松牧場 平 松 薫



石川県の南部に位置する加賀市という所で酪農を主体として農業を営んでいます。

現在、全国でおよそ3万4000戸の酪農家があり、近年1000戸

のペースで廃業・倒産・休業というかたち

で減り続けています。

石川県では93戸、加賀市では現在わずか2戸の酪農家を残すのみとなっています。

酪農家の抱える問題として、えさの値上がり・乳価の下落・後継者不足・大規模化に伴うふん尿処理量の増加による負担増などがあります。

酪農の流れはおおまかに2極分化しており、

1) アメリカ型の多頭飼育による生乳の大量生産 2) ヨーロッパ型の少頭飼育を行い乳加工製品の製造により製品を高付加価値化するという動きがあります。平松牧場はこれまでの乳価の下落、ふん尿処理の負担増、周辺地域の宅地化の進行などの状況をうけ、このままのやりかたではこの地での酪農は難しいと考え、酪農を継続していく手段として乳製品等高付加価値製品の製造と地域密着型経営を進めて来ました。

平松牧場のこの土地、水、空気によって育った牛の乳は地域の方々に飲んでいただくことが最良と考え、低温殺菌処理施設を造り、酪農家自らが生産・製造・販売（宅配）・回収まですべて行い、自らの能力と自らが取れる責任の範囲内にとどめること、目の届かなくなる卸は一切しないことにしました。

牛乳の製造は、週3回、3名～5名でおこなわれ、小さな工房なのでラインも1本しかなく、1度の処理で平均550ℓぐらいの牛乳が製品になります。中小零細業者のコスト削

減などの話がありますが、コストの削減は、牛乳ではない乳製品（加工乳・乳飲料）を競って作り、スーパーの店頭にならべることによりおこるものであり、本来の牛乳（生乳100%）のみを製造している零細業者にはあてはまらない事だと思っています。

牛乳の販路は、宅配と直売のみで宅配件数はおよそ700件、主にお客様の口コミでの販路を確保してきました。当牧場の人員と牛の頭数(乳量)を考えて700件



平松牧場人気の牛乳

ぐらいが限界ではないかと思っています。

牧場内の乳処理施設で作られた牛乳は、前日と当日に搾られた牛乳ですからとても新鮮です。ここで作られた牛乳は、宅配と直売、直売店奥の工房でアイスクリームとソフトクリームの製造用に使われます。

牛乳の消費は年々減り続けています。最近の事故により、1番飲んでいただきたい子供達が食中毒事件に巻き込まれていることにより今後ますます牛乳離れが拡大するのではないかと思います。

牛乳は母なる大地によって作られた自然高機能食品です。酪農家自身ももっと自立して自信をもち、地域の為に牛乳を作ることにより各地域にもっと新鮮で安心・安全な牛乳が



平松牧場の一角

提供できるのではないかと思います。

家畜（牛、鶏、豚）は以前、犬・猫などの様に人々に大変馴染み深い動物であったと思います。

いまでは、牧場は入っていけないところというふうに使われているかもしれません。もっと気軽に地域の人たちが牧場に立ち寄れる場所としてありたいと思っています。そのためにはさまざまな努力をしていかなければならないと考えています。この地で酪農を続けていくために。



牧場内の牛乳・アイスクリーム等の直売店

北陸 PICK UP

このコーナーでは、北陸を中心に地域の様々な活動や身近な問題などを取り上げてレポートしていきます。今回は石川県七尾市で、川の浄化などを中心に活発にまちづくりの活動をしている民間のまちづくり会社(株)御祓川の森山奈美さんにお話を伺ってきました。

七尾マリンシティ構想から川中心のまちづくりへ

—七尾市のまちづくり—



御祓川の川面

「御祓川の本日の透視度40センチメートル」
御祓川に面した「寄合処御祓館」1階、ギャラリー葦のウィンドウにプレートがかかる。御祓川は七尾市の中心部を流れる幅員約10mの都市河川。ごみやペットボトルなどが漂っていて、名前に反してお世辞にも美しい川とはいえない。だが、川浄化の取り組みがはじまった2年前と比べて、確実にきれいになってきていると地元の人には口をそろえる。